

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	長剣一路：修學旅行記：附録
Author(s)	布峰
Citation	龍南會雜誌， 8 3：[附] 1 5 -[附] 3 2
Issue date	1900-11-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5216
Right	

倏ち一大喊聲の、空をゆすつて聞ゆるあり。是れ兩軍の山上に衝突したるもの。劍花霜を散して、曉の星よりも白し。

我軍頻りに山上に攀ぢ、敵の援隊は、遠く前方の山上より發砲す。

眼を轉じて、道路一亘の方面を見よ。我軍の散兵線は、路上より、遠く右方の水田に延びて、發砲頗る鋭、山上の味方と協力して、將に山下に寄せたる、敵の中隊を塵殺せんとしつゝあるを。山は峻にして登る可らず、退却せんには一つの隱蔽地だにあるなし。餘りに深入したる敵兵は、身体こゝに谷りて、今殆んど哀れなる立往生の姿を呈せり。

斯る時しも、敵の本隊は、漸く前面の長堤に顯れ來りぬ。新手の兵勇、砲聲頗る激烈、白烟渦巻きて、堤上一帶朝霧わたれるが如し。彈丸ヒューッ、宛然ら頭上を超て飛ぶかと疑はる。さばれ勝ち誇つたる我軍、何條これしきの對抗に、勢ひるむべき。頑丈、又頑丈、生命かきり、根かきり、銃口の裂くる迄、銃身の溶けて流るゝまではと、山上山下、込めては放ち、放ちては込む掩護射撃。其音、たゞ釜中に豆をいるが如く、汗は瀧の如く、腕は棒に化して、漲り起る硝煙の間に、眼もほと／＼眩まんとす。敵や弛む。此時早く、彼時遅く、島野大隊長は、逞兵二箇中隊を提げて、道路上より進軍の曲に、足並一齊、風塵を蹴て、疾風の如く、敵の中堅に突撃を試む。あはや今、劍戟相磨し、銃槍相撃たんとする時、一聲嚨曉、野頭に高く響きわたる休戰喇叭の調。

演習は八時二十五分に始まりて、九時三十分に了る。砲聲と、硝煙と、雨つながら天外に消へ去れば、一路たゞ秋風の戎衣を吹くあるのみ。山に櫓あり、野に柿あり、汝れも勇士の心を學ぶが、

霜葉共に血よりも紅し。

二十

南北兩軍、打混じて、前きの長堤に息ふ。一水山より濺ぎ來りて、純白の色、玉よりも美はし。精米の如き河底の白砂と、相磨すとき、將に鏗然たる清韻を發せんとす。野菊の間を這ひ出でたる蟻螂、忽ち身を躍らして、彼岸に飛ぶよと見わしが、水上に差出でたる枯薄のあるに、ドツコイシヨと取りすがり、モンドリ打つて一回轉せしが、やがて起き直つて平然此方を見る、いと得意顔なり。

十時出發、八代に向ふ。血戰の餘勢なほ未だ衰へず、各隊爭ひて軍歌を唱ふ。余等の胸裏、また情懷の殆んど禁すべからざるものあり。乃ち湖海先生の玉作を借用して吟ずらく、

身入南朝國。心懸五百秋。山河八代郡。風雨九州舟。商女猶紅淚。征人欲白頭。都將今古恨。分付水雙流。

宮原町は、倉谷山の北麓にあり。昨夜南軍の宿泊せし處。唯だ一小市街に止るものから、流石に小川驛に一步を抜けり。氷川橋といふを過ぐ、紅檻兩岸に連りて、白水東西に曳けり。風色掬すべし。

十一時三十分、光善寺といふ村の長塘にて、一軍晝飯を取る。食後の休憩に、硝薬と、雷管とを餘まし持てる者、惡戯にも、左方路側に臨んで聳へたる、龍ヶ峯の中腹に向ひて頻りに發砲す。殷々、又殷々連嶺爲めに震動し、破裂せんとす。之を稽ふるに、音響、譬へば彈丸の如くなりて、直ちに山

の中心に打込まれ、其所に破裂し、爆發して、聲音四散するものから、上下四方の外皮、極めて厚く、且つ密なるがため、之を破りて出ると能はず。内部に籠り居て、只管轉々煩悶するが如し。或人が、秋の空氣は、音響を傳ふるに波動を以てせず、直角的に、四下四方に透徹せしむといひたる言も、成程どうなづかれぬ。

此時また例によりて、演習の審判官たる二宮講師は、諸幹部を占集して、今日の演習に關する講評の大畧を陳述されたり。

雨、兩三滴降る。

零時三十分、また進軍す。此あたり、山のたゞすまひ、平野の姿まで、悉く北九州の豊前地方に似通へり。穂薄と、薩摩芋と、シヤボンの木とは、道路到る處に見るを得べし。同志の一人、乃ち説をなして曰く、

薩摩隼人は健全なり。

薩摩隼人は、薩摩芋を喰うて生長す。

故に、薩摩芋は健全なり。

と此論法には、恐らく流石の渡邊教頭も、敢て一語の非難を挾む能はざるべし。一同覺へず洪笑。上片河村と云ふに至りて、本道にわかれ、余等は田疇の間の荒徑を、直ちに玖摩川の方へ進めり。蓋し八代に入る前、先ず宮地村の溪間に、西征將軍懷良親王の御陵を拜し奉らむとてなり。雲益々動きて、折から一村雨、颯と龍峯の巔より嵐し來れば、前眸に見ゆる妙見の森影俄かに黒く、鴉頻

りに啼く。

妙見社のある處は、をかき町を形れり。横丁にそげて、なほ一町ばかりも進み行けば、潺溪たる水韵先づ聞えて、忽ち薄茅戦げる一溪川の土手に出づ。仰げば、前岸水に臨みて、一崔嵬の峙つあり。橋な多れども、山側、岩赤く、松青き間を、一路蛇行して其頂へと這ひ登れり。小さき社の、藏しげに其狭間に祀られたるなど、小規模ながらしかすがに心ゆく眺めなり。

岸づたい、流れに添ひて溪間に入る。人家七八、老鶏屋上に鳴く處、菊花寒山の霜を含みて、東籬の下に匂へるも情多し。景物すでに自から俗塵を脱せり。

密樹黄葉翳たるころ、日蓮宗の大伽藍、空高く聳ゆるを看る。堂宇、隱現、修竹參差、石瀨玉を碎いて其前を流る。橋あり、門に到る。門頭に一大楓樹たてり、翠葉紅葉と相半ばす。一山方に風到りて、剪錦悉く亂れ飛ぶ時、暫らく川上に秋を漂はすも妙なり。忽ち本堂の裏手より、百舌鳥一羽、けたましく飛び出で來て、此方の岸に差出でたる、李の枯枝にとまりつ。キヨロくど四邊を見廻はして、何やらた多辯を始むる風なりしが、やがて又けたましく、彼方の林へと飛び去りぬ。

所謂西征將軍の御陵は、此所よりなほ一町餘の上流、兩峽いたく狭りて、川將に絶多なむとする處、途の右側にあり。桑麻秋風に戦いて、其三方を繞り、老楠一樹、天に參して、翠蓋長へに陵の全面を蔭せり。陵前に後醍醐天皇皇子懷良王御墓所、と記せる表札の懸れるを見、乃ち帽を脱し、銘

を投じ、東面して恭しく墳塋内に入れば、方五間ばかりの石柵、更に御陵の四方を圍みて、前面には質素なる白木の烏居建てり。陵上には露繁げき蔓草踰越して、小さきネズミモチの木、檜の木等も混淆して植はれり。同人相並ひて敬禮をすまし、暫し默然として、佇立し居れば、折からわろし來る峽嵐の一吹、颯と頭上を掠めて、一溪皆震ひ、枯葉心なくはらりと四下にみだる。

伏して惟るに、西征將軍、懷良親王と申すは、人皇九十六代、後醍醐の帝の第九の皇子にねはします。延元四年の春半ば、征西將軍に任せられて、鴨東一夜の落花は、空しく、錦袍のみ袖に、幾久じき恨を匂はしたるのみ。征路遠く、此九國の山河に下り給ひては、南船北馬、一日も閑散なる時なく、府を八代郡、高田の里に置かせられ、兵馬倥傯の間にありて、只管王事に努めさせ給ふこと殆んど二十有幾年。しばらく鎮西の天地に、錦旗の御光を輝かせ給ひしが、天運めぐらず、南風遂に競はず。長へに西濱百里の征途に、怨み盡させぬ英魂毅魄を留めさせ給ふ。阿蘇の烟よ、菊池の流よ、嗟吁南朝の恨事は、千秋萬古、遂に盡くるの期あらざる可し。

聞く、親王の高田の府におはするや、毎朝東岡に登りて、常に遙かに帝都百里の彼方を拜し居られきと。今岡上に一社を建て、里俗遙拜と稱ふとかや。

また吉野山裏の行宮に、父帝遺恨の寶劍を抱かせられて、慨焉崩宏させ給ひし時は、慟哭指かせられず。身親ら、御襯衣を宮地村洞泉谷に葬り給ひて、影陵を築かせられ、(里俗小袖塚と稱す)、傍らに、顯孝寺といふ菩提寺まで建立せられきと傳ふ。

あはれ、畏くも雲上貴紳の御身を以て、天涯他郷の山河に流轉し給ふ、そも幾年ぞ。父子一度東

西に別れて、雲水途は迢々、復た會ふの時なし。關山明けゆく月を看ては、誰か曉雲に涙なしといふ。傷しい哉。

龍ヶ峯にや雲迷ふらむ、溪水寒を呼んで、一山時雨また谿を繞りて來る。桑葉鳴りて、戎衣いみじう冷やかなり。乃ち口吟して曰く、

肥州南去景方愁。可耐晚風吹客裘。衝雨弔來將軍墓。蕭條落木一山秋。

山陵の上、南峽の中腹には、今なほ將軍寺と稱する孤刹あり。親王の御菩提を弔ふ所なりといふ。雨を避ける驅け込み見れば、境内左程に廣しといふにあらねど、自ら閑雅幽靜の趣に富めり。一徑の石疊、兩側に杉の並樹を控へ、稍々大きな一雙の杏銀樹、瑤瑤瑤々、秋を僧院に染めて山門を擁せり。泉石音幽あるところ、山茶花雨に散り、枇杷の花白き處、腹ふくらしたる山雀、軒頭にどまり居て動かす。

庫裡に住僧の若きを音信れて、しばし今昔を語る。抑も、此等は、中宮山悟眞寺といふ。悟眞とは、蓋し親王の御法號より由來したるもの。元、臨濟宗にして、南北朝の比、菊地武朝の創建せしころ。初めは一大伽藍にして、三十の堂宇、塔閣、山に倚り、水に臨みて結構され、法燈無明の闇を破りて、寺運の趨くところ甚だ隆んなりしが、天正年間、小西の爲に悉く焼かれ、爾來復た振はず。僅かに其名跡を存すといふのみにて、春風秋雨、遂に今日に及びたるなりといふ。されば素より古記録、古文書等の残り居るべき筈なく、寶物とし尊重せらるる者も、僅かに、後醍醐帝の親筆なり

と稱する消息文の一軸を除けば、別に括目すべきものもなし。今は宗派も變りて、曹洞宗となり、將軍の御菩提も吊はねば、あはれ千古の一名刹、秋風蕭條の裏に、空しく老いゆかんとせり。短葛江山の間に放浪すれば、人は常に啼涙の繁きを感じざる可らざるか。

今雨休みの辭して山を降るとき、青嵐倏ち吹き起つて、滿峰震鳴、杏銀の葉山茶花、枇杷の花、盡く亂れ飛ぶ。

三時二十分、玖摩川の長堤に達す。一練の大江、南の方巖嶂併立、烟嵐錯落せる山地より來りて、寒玉の流藍よりも青く、櫨樹滿目、錦繡を綴りて、兩岸の風色、さながら畫けるが如し。長塘北に奔りて、又南にめぐり、並樹の松、依稀として遠天に異様の姿態をくねらせる處、煙迷ふ平野の末には、三四の烟突挺然、空を衝いて八代の町よ、直ちにそこなりといふ。

前は即ち、日奈久、北薩に續く一望の冲積土壤、圃田、林藪、縱横錯雜、櫨樹また其間に群りたちて、青褐紅黃の色、目も綾ならむとす。雲煙の影遠く曳きて、水路迢々、二洲の間に迷はんとする處、櫨頭に半幅の紅を懸けて、客船今夜那邊に宿らむとするぞ。太陽時に斷雲の隙をもるれば、野頭忽ち明く、忽ち暗し。

偶々川上より、流れにまかせて下し來る例の舟筏、五艘、又六艘。人吉よりこゝに至るまで約八里。天下の最も嶮惡なる水路と稱せらる。四十有餘の急湍、奔瀨、霧を噴き、瀑を飛す間を強暴獯惡なる水伯龍神と懸命の戦闘を試みたる後、一度來りて此所に出れば、水勢極めて緩漫、舟子いづれも艫に蹲して、喰へ煙管に、罪なき白煙をバツ／＼と吹けるさま、いと優長なり。

懷へば、今歲陽春四月の頃、余亦一度舟に此急流を下りしとあり。層巒、重峰、青倒、碧奔の間、まさに一日の行を了へて、突如こゝにいで來れば、堤上の櫻樹、恰も是れ花爛熳の好時節。一帯の紅雲、直ちにわが前に曳きて、衣香扇影、春の水の暖きに泌み入る心地よさ、覺えず舷を叩いて友を放歌したりしが。今は秋風落莫、唯だ松影の、永へに常緑の色を寒空に誇るあるのみ。色去り香移るへば、曩日の艶姿美態、復た探ぬ可らず。形容空しく枯稿して、あはれ衣なき肌の寒きを夜毎ゆく水の冷やかなるにかこつらむか。一路蕭殺たる堤上の夕。散り來る紅葉を空車に乘せて、鼻唄うたひゆく車夫の紺法被も、いさゝ寒むげなり。

八代に入る。宿は何處だらうか。何、一番大きな、一番奇麗な宿屋に行けば可いさ。そうく、ネ君、松橋では、随分大きな、奇麗な宿屋に泊るとが出來たからネ。語らひつゝ、何やら奇怪な、狭き町を過ぎ行き、やがて本町といふに出れば、ボカリ、左側に大きな、奇麗な宿屋あり。由水館。此所だ、く。何、測量隊、記録隊十一名か可し。イヤ待て、此所は本部だ！。何、本部……。余等は斯の如くにして、幸か不幸か、此夜遂に、所謂大きな奇麗な宿屋に宿るととなりたるが、敗草鞋を脱ぎ捨つるに先ち、まづ八代宮に詣で行きぬ。蓋し此宮は、懷良親王の御靈を祀ひ祭れるところ新に其山陵を拜し來れる余等の胸裏には、格別に懷古の情の、禁すべからざるもの存すればなり。

宮は市街の風塵を脱して、舊城趾内に在り。境内極めて清楚、幽閑。踏みゆく白砂の、玉に似たるも且は嬉しきに、驚かるゝばかり立派なる、マートルの大木盤に諸手を清めては、心神いと清

は、わ、た、る、心、地、す。社殿また甚だ大ならざれども、極めて莊嚴なれば、神鈴打振ひて、御前に稽手默拜する時、神威の益々いやちこなるを感ず。

霜葉すべて落ち盡したる櫻樹の間くぐりて、神殿のめぐりを一周すとて、われ芝峰を擁して語らく。今春、わが此社に詣で來りし時はもよ、恰も、ある宵月明かき一夜なりき。四境に人影絶えて、天籁語はず。唯だ花香深く、大氣の裡に満ち度りて、花影おほろけに、地に印せらるるを看るのみ。此時獨り、社頭白砂の上に佇みて、吹くともなき風のまに／＼落英の二三片、ひらく／＼と兩袖に散りかゝるを眺めやりつゝ、あはれ、南朝五百の古を夢みたる時よ、余はねのづゝ、余の涙の、冷やかなる兩頬を傳ひて流れゆくを禁じ得ざりき。今は西風枯葉を捲くの日、此社頭に立ちて、白晝果して何事をか憶び得ん。君は多感の詩人あり、乞ふ暇あらば、他日陽春花再び匂ふ時、一夜節を度いて必ず詣で見給。月沈々として、花神君が塵なき胸腔を音信るゝとき、君正しく、涙に堪へざる或ものを夢むを得べしと。

本隊已に先に在り。銃は、社前城壘の下に、列をなしたるまゝ殘し置かれ、人は去りて、悉く城内の芝生に行き居れり。監督親睦會を開けるなりとて、其處に一團、こゝに一團、例の名指しなどして打興じつゝあるが、遠征の志士、一包の駄鰻頭に、一椀の澁茶を啜り、嬉々として戯れ居るさまは、宛然ら人生の罪なき縮圖の一なり。

聞けば、本隊は、三時八代に入り、直ちに此宮に詣で來つるなりといふ。尙ほさきに武藤教授は、

此八代宮、八代城、及び不知火の事に就きて、懇々一場の講話を試みられし由、遅参して聴きを得ざりしは、遺憾の極みといふべし。

雲漸く重り來れり、雨降らむとして、未だ降らず。破壁施飾色參南吹き越るも風に、野薄の花雪の如くみだる。

日暮、各隊、分れわかれて旅宿に向ふ。明日は正しく歸校すべき日なり。哀れにをかしき逆旅の夢も、今宵が見納めなり。五百の壯士よ、爾等が江南一夜の情は、今夕果して奈何なるべき乎。

城東弔古感何休。

此日臨江儘悵惆。

緬想南朝五百秋。

蘆花洲外水空流。

西風滿蘆荻。

一夜天涯客。

明月照鸛舟。

看來水國秋。

(下)

十六日、七時起床、窓外に風聲の浙瀝たるを聞く。雨は降り居らねど、骨に沁む奇寒耐ふべくもあらぬに、顔洗ひ了はり、外套引掛けて食事をすます。今日は再び熊本の地に還らざる可らざるか

と思へば、旅装を整ふる程も、何となく面白からず。

八時十五分といふに、諸隊一齊に八代を發す。北風破帽を掠めて、佩劍のさやぎ殊に凄じく、銃にはあらぬステッキ持つわが手も凍なんどす。

大村橋といふ、小さき木橋の架れるを度れば、前は昨日看し十里の平原なり天は暗澹として、地は荒涼、四顧の風物甚だ愁ふ。ことに疾風暮らに、前面より吹き來れば、歩行に一層の困難を覺え、塵土、烟を捲きて空を蔽ふとき、兩眼遂に開くべからず。友の一人、阿蘇のむら山は彼方ぞと指せど、灰雲深く鎖し居れば、噴煙の影らしきものに看えず。唯だ天艸島のあたり、時に日光や斷雲の間を漏れいつらむ、忽焉として赤らみ來ることをあるを見るのみ。各隊例によりて、勇ましく軍歌うたひつゝ進む。

路の片へに、一茅店あり。其横に、高く抜きいでたる柿の古木たてり。赤き實の一つ、下つ枝に取り残されて風のまにまに、右に左に、カブリ振りつゝありしがやがて、颯と吹き來る野あらしの一陣に、遂に脆くもさそひ落されて、其下の水瓶に哀れる入水をぞ遂げぬる。

籬やぶれ、廂傾きたる草屋の、十戸ばかりも連りたる孤村の間を進み行く時、里のうなるの、何地よりかくも集りけむ、水鼻垂らしたるが、數多わめき來て、やれ兵隊さんばな、兵隊さんばなと騒ぎ立つるに、瘠せ衰へて、野狐の如き姿したる棕犬までが、其尾につきて、盛んに吠え立つ。いまくしうこそ。

忽ち穗薄しげく打ち連れる土手路の下より、さながら死にいらむかとも疑はるゝ迄に、小兒の

啼き叫ぶ聲、風の絶間々々に聞ゆ。何事ならむと、好奇心にも、薄押分け降り見れば、今年生れて僅かに二歳ばかりの赤ん坊、無残にも、獨、檻樓に包まれて、畦の間に置かれあるなりけり。さて、一丁あまりも隔りたる、彼方の畑中に、一心不亂、鍬打振へる一農婦なむ、やがては此兒が最愛の、乳房もてる母なるらむを。さりとて、此悲鳴の、彼女の耳には聞えぬにや、むごたらしきことをするものかな。と茫然として、われまた暫らく泣く兒の傍らに佇み居き。

喇叭一聲、鏡町といふを過ぐれば、やがて有佐停車場なり。正に十時四十分。しばらく休憩して、晝食をした。此間、覺束なき二十八字詩など、ひねくりて樂しむ。

最早汽車も見ゆらむといふ頃、レールを挟みて、兩側のプラットホームに立並びたるわが三軍の壯士、寒氣に堪へで、頻りにガチ震ひしつゝ、軍歌を奏す。哀れにもまた勇しく、

折から、轟々たる音響は聞えぬ。やがて近く黒煙は看えそめぬ。列車は來りぬ、列車は來りぬ、長き、列車は、靜かに滑り來て余等の前に停りぬ。それつといふより早く、五百の兵勇、それ先きに、其兩側に群りかゝりたるさまは、宛然これ、巨大の百足蟲に、黒き小蟻の這ひまづはれるなりけり。余は遅く行きて、遂に適當の場所を占むる能はず。不佞不精、上等室に入るの己むを得ざるに至れり。何等の不體裁ぞ。

零時四十五分、發車す。矢張寒嵐に、吹かれふかれて歩いて行くよりも、車室にデツと腰かけてゐて、夫で行く方遙かにこゝろ持よし。初めの程は、例の如く車窓より首つき出して、龍ヶ峯や倉谷山や、八代の山々の、次第に遠く、遠くなるを眺め居たりしが、何時の間にかやどろくと睡

入りて、これはしたり、早や池田停車場に着きにけり。

京町坂より見渡せば、曾て新緑の都府と歌はれたる杏城の市街も、今は流石に、到處秋風の吹き度り居れば、落木蕭條、滿都たゞ日にく寂びれゆかんとせり。ふりさけ見れば、山容舊に依つて紫嵐の色微やかなる金峯の巔に、雨を含める白雲の一朶宿れり。あはれ、今宵はも、静けきわが龍田の學舎に、絶えて久しき時雨の音を聴かうよ。

三時、恙なく校門に入る。ある事情の爲に、今回の行に加はる能はざりし職員、生徒など門頭に整列して一行を迎へ居れり。大隊長の命令にて、全軍玄關前の芝生に、蘇鉄を繞りて一大圓陣を形づくれば、やがて渡邊教頭、其一方に進み出で給ひて、左の事項を演説せらる。

一、校長は、もとより今回の旅行に加はり居られしが、長崎醫學部の卒業式に臨席するため、遂に中途より引還すの已むを得ざるに至れり。

一、今回の旅行は、従前のものに比して、少しく其騒を異にするところありしに、諸生能く学校の希望するところを服膺されたるは、余の殊に満足するところなり。一般職員の意見によれば、今回の旅行に、昨年以前のものに比して、甚だ勝る點多かりし由なり。

一、演習に就ては、諸君の熱心は、余飽くまで之を見受けたるが、なほいかゞはしき點、其他に尠からねば、以後は益々努力して、良成績を得るに至らむとを期すべし。

一、解隊後、一行の慰勞迄に、習學寮食堂にて、職員、生徒一同を響應す。

右了りて解散。

寒潮拍々滿江洲。
半夜江樓吹笛坐。

飽看西風送客舟。
蘆花明月水邊秋。

松下何人弄橫笛。
松橋西望水煙連。

萬里蒼波吳越船。
鄉愁吹徹夜深天。